



東アジアの言語と表象

関西大学アジア文化研究センター「鱗澤文庫」の珍藏本

内 田 慶 市

Rare books about Masuzawa Bunko Collection of CSAC

UCHIDA Keiichi

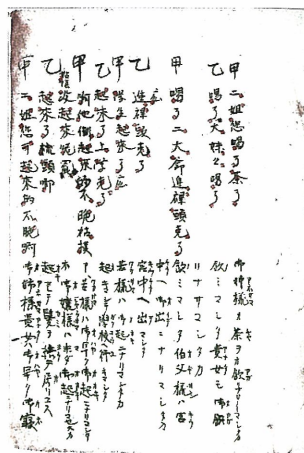
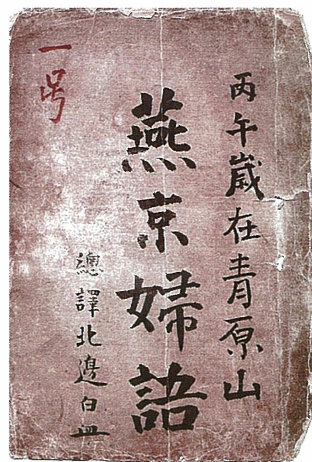
Last year, Center of Studies of Asian cultures (CSAC) created Masuzawa Bunko. Masuzawa Akio that is sometime professor in Japan University and he presented his collection which comprises about 10,000 volumes for our Center. There are many rarely books about History of Education in Modern Chinese. This time I would like to introduce some rarely books in Masuzawa Bunk, in addition to provide a research chance for our readers,

キーワード：鱗澤彰夫、近代日本、中国語教育史、ピジン、中国語テキスト

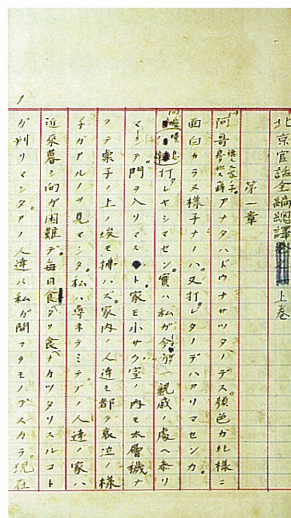
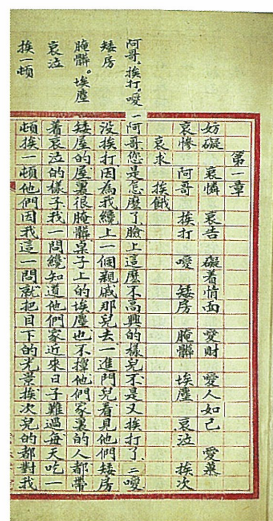
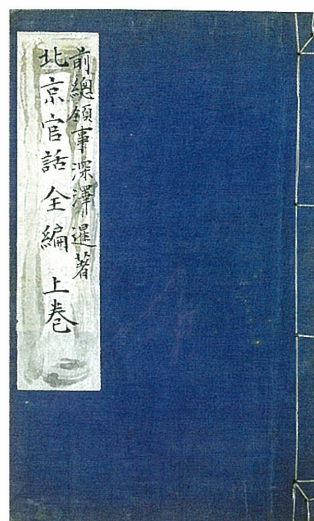
0. はじめに

2014年の暮れ、元日本大学教授鱗澤彰夫氏の全蔵書が関西大学アジア文化研究センターに寄贈されることに決まった。その経緯についてはここでは触れないが、鱗澤氏はこれまで、特に、近代日本における中国語教科書類を中心に蒐集されてきており、その量は恐らく世界最多といっても決して過言ではない。これまでこの分野の研究としては故六角恒廣氏が先ず挙げられ、六角氏の編纂になる『中国語関係書目増補版1867-2000』（不二出版、2001）は近代日本の中国語教科書の出版状況を知る上ではバイブル的な地位を占めてきた。しかし、今回の鱗澤氏寄贈本の詳細な整理によりそれは大幅な修正が求められるはずである。また、かつて関西大学東西学術研究所でも関連する教科書類は相当集められており、今回の寄贈書と合わせれば、近代日本における中国語教科書はほぼ網羅されるように思われる。

実は鱗澤氏寄贈本には教科書類だけでなく、広く、中国語学、言語学、中国文学、漢文学等々に関する文献も数多く収蔵されており、中には例えば次の『燕京婦語』のように「天下の孤本」と呼ぶべきものも含まれている。現在、鋭意目録を作成中であるが、今回、その中でも極めて貴重なもの、珍しいものについて幾つか紹介しておくこととする。今後のこの分野の研究に有用と考えるからである。



1. 『北京官話全編』(深澤暹著)



本書は、初稿本、定稿本、総訳（『北京官話全編総譯』）からなり、それぞれ全7冊、全378章からなる。

著者深澤暹の略歴は以下の通りである。

明治9（1876）年4月28日

旧肥前藩五島藩士深澤立三（旧名祐人）の次男として東京麻布鳥居坂の旧藩邸内で生まれる。海軍を志し「攻玉社二松学舎」に学ぶも近眼のために志を転じ三橋信方の横浜英語学校に学ぶ。父のすすめで志を支那に馳せ、英語学校卒業（明治26=1892年7月）後、当時横浜南京町に隠棲していた田島藏之助に就いて支那語を学ぶ。

次いで清韓語学校が創立されるや之に入って更に支那語を修め、1年で卒業。

明治27（1894）年5月

外務省留学生試験に合格するも、人員に制限あり、船津辰一郎一名だけが採用。

明治29（1896）年5月 再受験でようやく採用され、北京留学を命じらる。

明治31（1898）年11月 外務書記生に任ぜられ上海総領事館勤務

明治32（1899）年12月 杭州在勤

明治33（1900）年6月 再び上海領事館へ（日清通商条約改定の交渉事務）

明治37（1904）年2月 墨西哥公使館在勤

明治38（1905）年3月 桑港領事館に移る

明治40（1907）年7月 漢口在勤するも、高橋総領事と意見を異にし離任帰朝

明治41（1908）年11月 奉天在勤

大正元（1912）年10月 杭州領事事務代理

大正3（1914）年6月 杭州領事館副領事（長沙在勤）

大正5（1916）年 吉林在勤

大正7（1918）年2月 牛莊へ、発令4日で汕頭へ

大正8（1919）年5月 公使館三等書記官として北京公使館在勤

大正10（1921）年6月 再び領事として南京へ

大正12（1923）年1月 吉林領事館へ

大正14（1925）年3月 同上総領事に栄転し勇退

昭和3（1928）年-11（1936）年

奉天領事館囑託（昭和7年12月から昭和8年1月まで吉田茂大使の満州中国旅行に随行）

昭和11（1936）年12月 辞して帰京

昭和19（1944）年10月22日没

（以上は、『續對支回顧録』下巻「列傳深澤暹」（1052-1061p、1942）および「深澤暹関係文書目録」解題（2006）による。）

深澤暹の著書には他に『邦譯西廂記』（1934年、東京秋豊園）がある。また、上記の『續對支回顧録』下巻「列傳深澤暹」によれば、「『元朝歴史物語』『明朝歴史物語』『清朝歴史物語』等は近く上梓の予定である」とあるが、実際には刊行されなかったようで、その未刊原稿も今回の寄贈書に収められている。

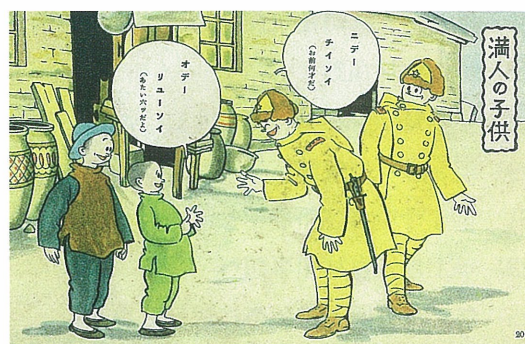
それらは、『中国歴代通俗演義』（蘇東藩著、全11巻、1916-1926）の「元史演義」「明史演義」「清史演義」をそれぞれ翻訳したものである。

さて、本書の言語的特徴にいえば、次のようにいわゆる「北京語の文法特徴」（太田辰夫）の7項目は全てクリアーしていて明らかに北京語であり、北京語資料としては『語言自邇集』に勝るとも劣らない第一級資料と言うことが出来るであろう。

- “给” 給你請安。(2)
“来着” 都上那兒逛来着？(63)
“呢” (沒有“哩”) 你還提他們世兄呢。(3)
“別” 你可別多心。(6)
“很” 他的口音很不好。(4)
“多了” 近來都是比先好多了。(7)
“咱们” 那麼僂們明兒見。(22)

2. ピジン中国語の資料——「兵隊支那語」の一斑

鱒澤文庫にはビジュアル資料も多く含まれているが、その中でも、以下の「ピジン中国語」に関する資料は貴重である。



これは、正確な発行時期は不明だが、昭和前期のもので、荒井一壽画『日滿支會話入教育漫画 從軍陣中漫画』というタイトルの「軍事郵便葉書」であるが。ピジン中国語（兵隊支那語、沿線支那語）の研究には極めて有益なもので、たとえば、以下のような典型的なピジン中国語が登場する。

- ニデー チイソイ (お前何才だ = 你幾歲)
オデー リューソイ (あたい六ッだよ = 我六歲)

ニデーマーオ テンハオーなア (お前の馬いいな = 你的馬挺好)

リーベンリエン タイピンデー シンナー（日本の兵隊さんよろしいな＝日本人太平的，行呢）

オデー チャスイ、イーゴー、シンジヨ（俺にお茶一杯くれないか＝我茶水一個進上）

ヤオーフーヤオー（いるかいらないか＝要不要）

ターターデーヤオー（澤山もらひたいよ＝大大的要）

トントンデー シイエシイエ（解りました有難う＝懂懂的，謝謝）

シーチオー クワイヤオ ダオラ（列車がもうすぐ着く＝汽車快要到了）

ワンラー（終わった＝完了）

タイジン ナールチュイ（お客さんどちらへ行くんです＝大人哪兒去）

何でもいからクワイクワイデー（早く早く＝快快的）やってくれ

鱒澤文庫には、こうした「軍事郵便葉書」はこの荒井一壽のもの以外にもう1種収められているが、そちらは「ピジン」というよりはむしろ中国語単語集のようなもので、それぞれの単語にはタカナで表音がされているものである。

また、『支那語漫画早覚』という「漫画で学ぶ中国語教本」の先駆け的なものもある。



「輝文館大阪パック社」により昭和14年4月1日に発行されているが、以下のように当時大阪外国語学校支那語部教授であった金子二郎による序文が付されている。

輝文館から面白いものを持つて来た。陣中慰問品になるので、兵隊さん達が厭きたら支那にでもやつてもらへ支那人達が日本語を一つでも覚える足しになりはしないかと言ふのださうだ。さうだ。

なるほどと感心した。陣中小閑を得た兵隊さんがこの漫画を支那の子供と一緒に見ながら”ニーイハーオア””コンニチハ”とやつてゐるところを想像すると微笑ましくなる、この小冊子が少しでも兵隊さん達の御苦勞を慰めることが出来、且つその上可哀相な支那の子供まで喜ばすことが出来、更にはお互ひが本當にお互ひの言葉を學び初めるきっかけともなり得るならばこんな結構なことはないと思ふ。

昭和14年3月

大阪外國語學校支那語部教授
金子二郎

つまり、これは日本軍兵隊が中国語を學ぶためだけでなく、現地で中国人の日本語學習にもという目的で作られたもののようである。それにしても、「可哀相な支那の子供」という表現から当時の日本における知識人の中国觀の「限界」の一端を見ることが出来る資料でもある。内容や挿絵はやはり次のように日中戦争を反映したものになっている。

- 中国人が配る傳單（宣傳ビラ）の挿絵に「長期抗戰 吾有勝算」とあり、その吹き出しには「オヤオヤ誰も貰うて呉れん」「まだあんな事を云つてやがらア……」とある。
- “剃頭舗”（床屋）の挿絵は「これぞ無敵日軍鉄兜刈」。
- “我們的敵人是國民黨和共產黨。”

なお、使われている中国語そのものは至って「もとも」であるし、かなり「ハイカラ」な言葉も登場している。

“電影”（キネマ）
“有聲電影”（トーキ映畫）
“棒球”（野球）
“電梯”（エレベーター）
“皮酒”（ビール）
“自來水筆”（萬年筆）
“打字機”（タイプライター）
「スペシャルランチお待ち遠さま」

また、基本的には北京語だと思われ、1語だけだが、方言の違いなども記述がある。

“洋車”（人力車）
“黃包車—上海”
“膠皮—天津”

知識人の「戦争協力」という点では、次の『オトモダチ』（昭和14年11月発行）という日中対照子供向

けグラフ（漫画）誌の巻頭には「サトウ・ハチロー」の詩が登場する（この号では後半にも「みんな仲よく」という詩が掲載されている）。

亜細亜に新しい朝がくる
亜細亜にたのしい
朝がくる
僕等の僕等の朝がくる

暗い夜空よ
さようなら
明るい光りが もう来たぞ

のびよ草の芽
わがころ
うれしい時は 近づいた

亜細亜にたのしい
朝がくる
僕等の僕等の 朝がくる

これの中国語訳は以下の通り。

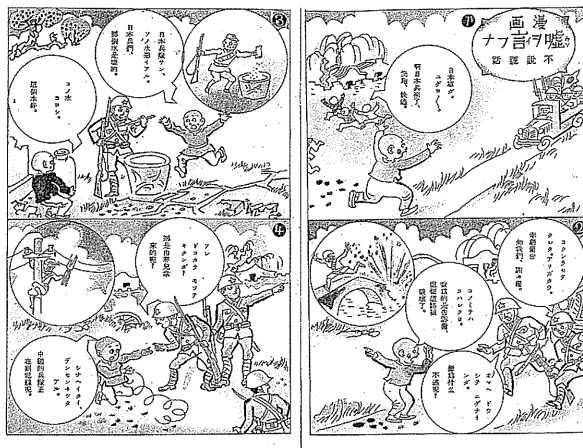
快樂的早晨來到亞洲了
在我們的亞洲上
虧阿樂的早晨來到了。
我們的、我們的早晨來到了。

黑暗的夜啊、
再見。
好光明的光已經來了呀。

長起來、草的芽、
我們的心、
歡樂的時候來到了。

在亞洲上、

快樂的早晨來到了、
我們的、我們的早晨來到了。



このグラフ誌の「漫画嘘ヲ言フナ 不説謊話」では「アルヨ」言語も登場している。

日本軍ダ。ニゲロニゲロ。 啊日本兵來了、快跑、快跑。
 オマヘ ドウシテ ニゲナインダ。爾為什麼不逃呢。
 コノミチハ コハレタヨ。我為的是告訴爾、這條道路被破壞了。
 ヨクシラセテクレタ。アリガタウ。幸虧爾告知我們，謝謝爾。
 日本兵隊サン、ソノ水悪イアル。日本兵們、那個水是壞的。
 コノ水ヨロシ。這個水好。
 ソレドコカラ モツレキタンダ？ 那是由那兒拿來的呢？
 シナヘイタイ、デンセンキツタアル。中國的兵隊正在割電線呢。
 ドコニアッタ。 在那兒有的呢。
 シナヘイタイドテコハシタアル 中國兵隊在破壞河堤呢。
 ……

本グラフは下記の「趣旨」からも分かるように、まさに日本の「亜細亜は一つ」という大東亜共栄圏実現のための子供向け小冊子であるが、これまでほとんど取り上げられてこなかった資料である。

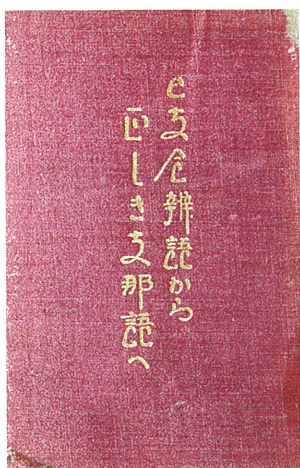
趣旨

亜細亜はまさに明けようとしてゐる。亜細亜は一つとなつてたちあがらふとしてゐる。
 その為めには真に亜細亜全民族の魂と魂が結ばれ、互ひが互ひの為に心を捧げあはなければならぬ。
 今回の聖戦もみな亜細亜永遠の平和樹立の為めであり、又東亜新秩序建設の為めである。
 吾々が「おともだち」を發行する所以は、亜細亜の根本的融和を思ふからに他ならぬ。
 をさな心の結合ほど堅いものはない。お互に社會の荒波に揉まれて後も、忘れ得ぬなつかしさをもつて思出されるものは幼少年時代の事である。

将来互に國家を背負つて起つべき幼少年達の清き心が固く結ばれてこそ、東亜の真に理想の天地が實現するにちがひない。吾々は東亜の幼少年間の魂のつながりの為に呼かけると共に皇軍将士の勞苦に對するわが幼き同胞よりの心からなる慰問の一つにもと思ひ本冊子を發刊した次第である。

3. 中谷鹿二関係文書

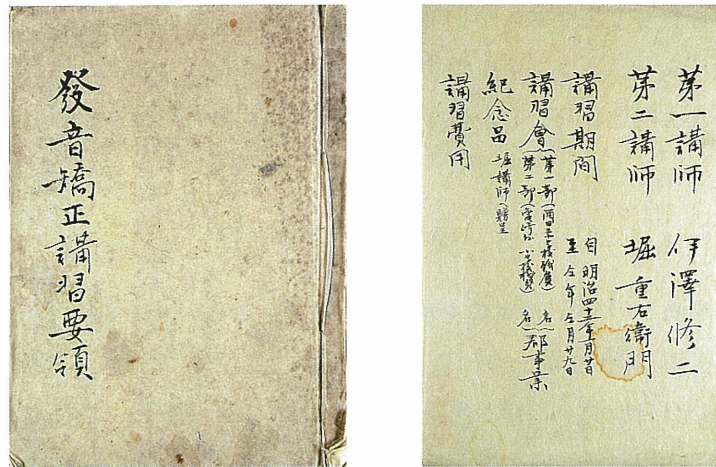
中谷鹿二はかつて「善隣」（大連）の主幹を務めた人物であるが、上でも触れた日中の「負の遺産」とも言うべき「ピジン中国語」（中谷はこれを「日支合弁語」と呼ぶ）に対して「正しい支那語」を学ぶべきだという主張を「満州日日新聞」に1924年から34回にわたって連載し、当時であっては特異な存在であったが、寄贈書にはこの中谷鹿二の著書が以下のようにほぼ全て収められている。



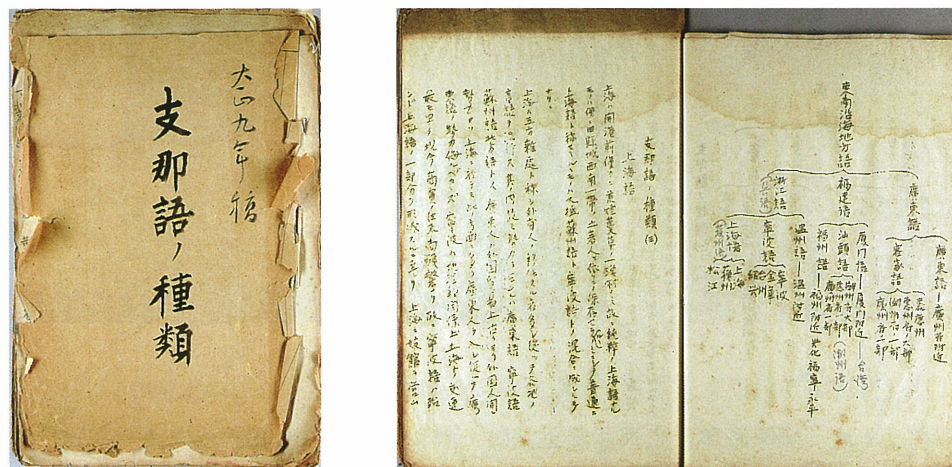
このうち『日支合弁語から正しい支那語へ』はピジン研究には欠くことの出来ない資料であるし、『自昭和三年至昭五年度 關東廳職員支那語獎勵試験・關東廳警察官支那語通譯兼掌試験・外務省警察官支那語獎勵試験・滿鐵華語檢定預備試験・憲兵支那語通譯試験 問題並詳解』（大連善鄰社發行）、『昭和十四年度康徳六年度 關東局職員支那語獎勵試験・關東洲廳語學檢定支那語試験・關東局巡查捕通譯兼掌試験・關東軍憲兵隊滿語試験・滿鐵語學檢定支那語試験・滿洲國政府語學檢定滿語試験 問題並解譯』（同上）といった檢定試験問題集も極めて珍しい資料と言える。

4. 伊澤修二関連書籍

近代日本における中国語教育において唯一科学的な方法による中国語教育を目指した伊澤修二のこの面における本格的な研究はほとんど行われていないと言ってよい。それは彼の著作が整理されていないことにも起因していると思われるが、鱒澤文庫には『視話法』『支那正音發微』『支那語正音練習書』『視話應用清國官話韻鏡 同音字解説書』など伊澤の著作も多く含まれており、筆者架蔵のものと併せれば相当なものになる。中には、『發音矯正講習要領』という伊澤文字を使用した日本語發音矯正の講習会用テキストなどこれまで全く言及されてこなかった資料もある。



5. 「中国語ノ種類」



本資料はガリ版刷りのもので内容は極めて質の高い「中国語概論」である。

たとえば、先ず、「支那語」とは「漢人間に通行する言語」つまり「漢語」であるという正しい理解の上に「官話」を取り上げ、それを大きく「北京官話」と「南京官話」に大別している。この場合、「北京官話」と「南京官話」とはそれぞれは必ずしも「北京」「南京」に限定したものではないとし、現在私たちが言っている「北方語」と「南方語」の区別であることも指摘している。また、「支那語」は「官話系」と「非官話系」すなわち「官話」と「方言」には分けられるとし、各方言の特徴についても述べている。

『支那語雑録』

支那語ノ種類 (一)

単ニ支那語ト云フ時ハ其意義頗ル漠然タルモノニシテ僅カニ「漢人種間ニ行ハルル言語」ト云フノ意ニ過ギザルノミ、故ニ之ヲ種々ニ分類シテ考察スルコト必要ナリ

官話ト云フ意味ハ場ニ依リ諸種ノ異レル觀念ヲ表スモノトス、土語ニ対シテ官話ト云フ時ハ各地何レモ官話アリ、例ヘバ福建ニハ福建ノ官話アリ、広東ニハ広東ノ官話アリト云フガ如シ、然レドモ最モ普通ニ用キラルル官話ノ意義ハ「語音ノ声音語句ノ構成等比較的一貫セル文法ニ則レル高級的ノ支那語」ト云フニアリテ此ノ意義ニ従ヘバ支那語ハ官話ト非官話トニ大別スルコトヲ得ベシ即チ官話トハ

北京官話ノ系統ヲ引ケル 黄河流域ノ六省、淮河流域ノ江蘇安徽ノ北部ニ行ハルル言語

南京官話ノ系統ヲ引ケル湖北、四川、雲南、貴州、広西、湖南及南京杭州ニ行ハルル言語ヲ云ヒ（四川地方ハ成都官話ノ一系統ヲ成スト論ズルモノアリ）

……

非官話語トハ（地方語、方言）福建語（廈門語、汕頭語、福州語）広東語（本地語、客家語）浙江語 江蘇ノ一部、浙江ニ行ハル等ヲ云フ

南京ト杭州トガ江蘇浙江ニアルニ拘ラズ浙江語ノ系統ニ属セズシテ南京官話ヲ流行スルハ曾テ国都ノ地タリシニ因ルト解セラル

先年教育部読音統一会ニ於テ標準語採用ノ議起ルヤ一般ニ北京語ヲ基礎トスルコトニ一致セシト雖モ間々支那語ノ標準語トシテ北京語ハ不完全ナリト主張スル者アリ、章太炎氏ノ如キハ其ノ一人ニシテ氏ノ説ハ湖北附近ノ官話ヲ以テ支那語ノ正流トナスニアリ、而シテ其ノ理由トスル所ハ金元以來北方ニハ朔虜侵入シテ中原ノ音ハ江漢ニ移リ去レリト云フニアリ、此ノ説ハ全ク根拠ナキ説ニハ非ザルガ如シ。

「上海語」などについても、以下のように当時にあつては極めて正確な記述がなされている。

上海ハ開港前僅カニ荒煙蔓草ノ一漁村ノミ故ニ純粹ノ上海語ナルモノハ僅ニ旧県城西南一帶ノ土着人ニ依リテ保存セラルルノミニシテ普通ニ上海語ト称セラルルモノハ大抵蘇州語ト寧波語トノ混合ニ成レルモノナリ

上海ハ外国トノ交通最モ頻繁ナル關係上外国語ヲ混入スルコト少ナカラズ、即チ外国語ヲ音訳スルコト概ネ上海ヨリ出ズ、例ヘバ密司脱（ミスター）引擎（エンジン）馬達（モーター）德律風（テレホン）如キナルヤ准文即語トシテ支那人間ニ使用セラル

上海ハ英語支那語折衷ニ成レル一種特別ノ英語行ハル、之ヲ Pidgin English (Business English, 転化) ト称ス、即チ商用語ナリ。上海ニテハ支那人之ヲ洋泾浜語トモ云フ、支那人ハ之ヲ英語ト考ヘ、外国人ハ之ヲ支那語ト考ヘ使用スルモ其実綴字、発音、文法全ク特殊ナルモノ也……

この著者が誰なのかが現在のところ未詳だが、表紙には次のような情報が載せられており、今後の調査が待たれるところである。

大正十年五月稿

大平正美
大坪重通
大坪重徳

6. おわりに

その他、目についたものを幾つか挙げておく。

- 『官話散語摘要』

編者等未詳だが、使われている言語を見ると、明らかに官話指南の系統のもので、北京語あるいは北方語資料として有用と思われる。

- 『支那今文字典』（稿）

表紙に明治36年1月起稿とあり、薄く「宮島大八」の文字も読み取れるところから、宮島大八による字典草稿と思われる。

- 『譯官雑字簿』

唐話辞書類集にも収められている唐話辞書（漢字俗語単語集）の手写本。

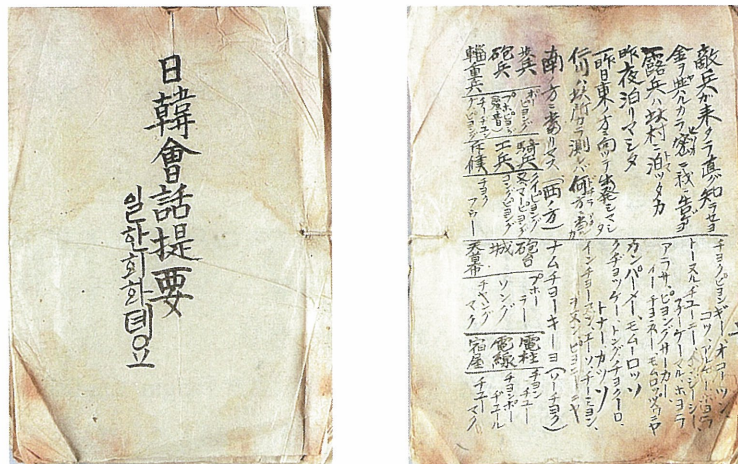
- 『連聲口訣』

恐らく『悉曇連聲捷経切韻口訣』の抄本。

- 『金雲翹扱』（保六六年二月新刻、福文堂蔵板）

中国の白話小説を元にしたベトナムでは有名な小説で、字喃で書かれたもの。

- 『日韓會話提要』



軍隊中国語ならぬ「軍隊韓国語」の手写本。韓国語はハングルでなくカタカナで書かれている。ロシア兵の話が多く、日露戦争の頃のものの可能性もある。

此道ハ車ヲ曳イテ往ケルカ
大邱迄里数ハ何里位有ルカ
凡ソ十五里位有リマス

此道ハ何処ニ行ク道カ

釜山ヘ行ク路デス

……

途中兵士ニ逢フタカ

ハイ露兵ニ逢ヒマシタ

……

敵兵ガ來タラ直グ知ラセヨ

金ヲ與ルカラ密ニ我ニ告ゲヨ

露兵ハ此村ニ泊ッタカ

昨夜泊リマシタ

今回取り上げたものは約1万冊のうちほんの僅かであり、他にも『官話指南』の九江書會版や、ウェードの『語言自邇集』の全ての版本など、まさに中国語教育史研究、中国語史研究の第一級資料群となっており、先ずは詳細な目録、書誌作りが急がれるところである。

特に中国語教育史研究の分野では、これまでに六角恒廣氏の不二出版の一連の影印集以外に、中国においても、『日本明治期漢語教科書彙刊』（張美蘭主編，全26冊，広西師範大学出版社，2011）、『日本漢語教科書彙刊・江戸明治期篇』（李無未主編，全60冊，中華書局，2015）がすでに出版されているが、この鱒澤文庫の資料によるそれらの増補も現在、李無未氏と計画されている。

いずれにせよ、この鱒澤文庫は様々な研究分野から利用されるはずであり、こうした「宝の山」を無償で提供していただいた鱒澤彰夫氏に心からの感謝の意を表したいと思う。